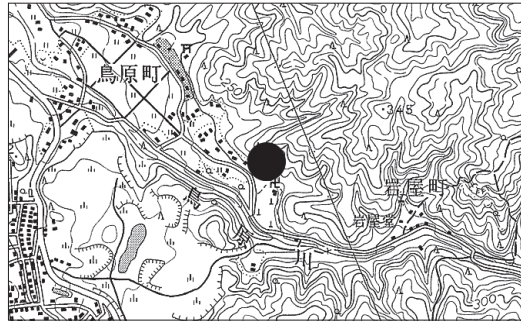


うぐいす
鶯窯跡

所在地 瀬戸市岩屋町・鳥原町
 調査理由 東海環状自動車道建設
 調査期間 平成11年4月～11月
 調査面積 400 m²
 担当者 小澤一弘・宇佐見 守・織部匡久



調査地点 (1/2.5万「猿投山」)

調査の経過 鶯窯跡は、瀬戸市岩屋町・鳥原町に所在する14世紀の後葉から15世紀前半の窯跡で発掘調査は東海環状自動車道建設のため愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成10年度は平成11年1月から3月にかけて灰原部分と斜面直下の平坦部分の900 m²調査を実施した。平成11年度では窯体が想定される尾根直下の調査区A区と昨年度の調査区の北側灰原部分のB区の二つの調査区400 m²を平成11年4月から11月にかけて実施した。また窯体の位置を確認するためにA区の下方にトレンチを設定し、工事用道路の橋脚部分（昨年度の調査区の東）についてもトレンチ（C～L）を設定し、それぞれ実施した。

立地と環境 瀬戸市のほぼ中央に広がる品野盆地の一角で、水野川流域に広がる盆地中央部から南東方向へ細長く伸びる谷状の奥部分に鶯窯跡は位置し、水野川の支流鳥原川と右岸段丘上に形成された狭小な沖積地を見下ろす標高200 mから237 mの南側斜面に立地している。周辺には、縄文時代早期・前期の鳥原縄文遺跡や岩屋堂遺跡、古墳時代以降の鳥原遺跡、近世後期から明治にかけて磁器を焼成した浄源寺西窯、そして昨年度の調査区の東には近世後期から明治期にかけての屋敷跡、源吉屋敷が知られている。

調査の概要 今年度の調査区は、尾根部分と窯体が想定された尾根直下の南斜面のA区と昨年度の調査区の北側にあたる灰原部分のB区の2調査区、A区下方のトレンチ、工事用道路橋脚部分のトレンチの調査を実施した。A区とA区下方のトレンチ調査からは窯体1基と工房跡8ヶ所を検出した。工房跡の一つS X 01・Bからは焼成前の天目茶碗5枚重ねたものが13個出土した。窯体1基については保存されることとなった。B区の灰原部分では昨年度の調査区と同様に、厚い堆積層から膨大な量の遺物が出土した。

窯 跡 尾根に近い南斜面のA区南端で窯体1基（S Y 01）の煙道部を、A区下方のトレンチでは燃焼室を検出した。

S Y 01は、真北から西に約2度振れているもののほぼ真北を主軸として築かれており、標高は煙道部で231 m、分焰柱部分で227 mを測り、窯体の比高差はおよそ4 mである。

窯体が保存となり焼成室部分は調査していないが、現存長は煙道部から燃焼室の焚口までの5 m 60 cmを測る。窯体最大幅の計測値は得られなかったが、平面プランから220 cmから240 cm程度と推定できる。

燃焼室の左右窯壁には焼台や粘土を用いた改修痕が認められ、特に左窯壁では少なくとも3度の改修が顕著に見られる。当初は大きな石なども焼台とともに用いられている。各段階の窯壁はそれぞれがよく被熱している様子が確認でき、最終段階の窯壁間は160 cmを測り、築窯当初の270 cmからおよそ60%程度にまで縮小されている。左右窯壁は左窯壁が

平面プランで通常みられる膨らみを確認できるのに対し、右窯壁は多少屈曲部が認められるもののほぼ直線に近いラインで燃烧室・煙道部に至るものと推測される。

分焰柱はほとんどが失われており、かろうじて基部のみが確認でき、残存部は隅丸長方形を呈し長軸は 50 cm ほどまで確認でき、短軸は 48 cm 測る。床面よりの残存高は 15 cm である。燃烧室の埋土は赤色土が中心であり、一部に陶片、焼台、窯壁片などを含み粗い浅黄色の土層が混じる。燃烧室の床面は被熱し 5 cm から 10 cm の厚さで赤色硬化していた。

煙道部は、先端は削平されているもののほぼ確認することができ、床面傾斜は約 45 度から 50 度、そして段をなし約 10 度から 15 度の傾斜で先端まで続く。(織部匡久)

工 房 跡 今回の調査で工房跡と考えられる平坦面を 8 ヶ所確認した。構築された位置から大きく 3 群に分けることができ、S X 01・02・08 は S Y 01 の西側の南向き斜面を削平して、S X 06・07 は S Y 01 の東側の南向き斜面を削平して、S X 03・04・05 は S Y 01 の北側の尾根または尾根直下の南向き斜面を削平して構築されている。

S X 01 は S Y 01 の 10 m 程西にある。西側と南側が調査区外に続くため全容を明らかにすることはできないが、花崗岩の岩盤を掘削し、確認しただけでも 4 ヶ所 (A・B・C・D) の平坦面を構築している。

S X 01・A は S Y 01 に一番近い平坦面で、標高は 228.8 m を計測する。南西部分が S X 01・D により削平されているもののほぼ全容を明らかにすることができた。岩盤を谷側に高まりを残すように掘削し、東西約 1.9 m、南北約 3.4 m の平坦面を構築している。平坦面の中央北寄りで東西約 0.4 m、南北約 0.5 m の楕円形をした焼土面とそれに続く中央南寄りで東西約 0.75 m、南北約 1.3 m の楕円形をした炭化物の広がりを確認した。平坦面内の遺構としては谷側に掘り残した高まりの南端すぐ横で建物の柱穴と考えられるピット 1 基と、平坦面のほぼ中央、炭化物層の下からピット 1 基を検出した。

S X 01・B は S X 01・A の北西にある標高 229.2 m の平坦地で、S X 01・A より一段高い位置にある。当初は岩盤を洞窟状に掘り抜いて平坦面を構築したと考えられるが、天井部分は崩落のため一部しか残っていない。平坦面は東西約 2.1 m、南北約 2.0 m、高さは現存するところで約 1.3 m を計測する。平坦面の中央南側で粘土の広がりとその下から焼土を確認した。出土遺物として、北壁に添うように並べられた成形後の未焼成品と思われる粘土群と 5 枚重ねの未焼成天目茶碗群を検出した。これらは上下二層に別れており、埋土の状態から埋没した時期に差があることが確認された。上層の粘土群は、残りが良くないが、碗を重ねて置いた状態のものが 22 個出土した。下層の天目茶碗は風化した花崗岩層に埋没していたため良好な状態で保存され出土したのと思われ、平坦面の北壁中央に添って天目茶碗を 5 枚重ねたものが前列 8 個、後列 5 個置かれた状態で出土した。この粘土群は粘土を成形、乾燥させた後、施釉するまでの間陰干ししていたものがそのまま埋没したものではないかと考えられる。

S X 01・C は S X 01・B の 3.0 m 程西にあり、標高は 230.0 m を計測する。西側の大部分が調査区外のため、全容は明らかではないが、岩盤を掘削し平坦地を構築している。平坦面は確認できるところで東西約 0.85 m、南北約 1.0 m を計測する。S X 01・D は S X 01・B の南にある標高 228.4 m の平坦地で、S X 01・B より一段低い位置にある。遺構の

残りは大変良い。岩盤を南側を開くように掘り下げ、残りの三方に高さ約 0.25 m の壁を作っている。平坦面は東西約 2.2 m、南北は約 3.0 m を計測する。平坦面で土坑 6 基とピット 4 基を検出した。土坑は平坦面南側で左右対称に検出され、建物の柱穴と考えられる。また平坦面のほぼ全域で、炭化物の広がりを確認し、さらにその下層の壁に囲まれた範囲から東西約 1.2 m、南北約 1.6 m の楕円形をした焼土を確認した。その他には S X 01・D の西で平坦地を確認した。標高は 228.8 m を計測し、S X 01・D より一段高くなっている。西側が調査区外へ続くため、全容は明らかではないが、南北約 2.7 m、東西は確認できるところで約 3.0 m を計測する。遺構としては平坦地北側で溝とそれに添うような形でピットを 10 基、さらに溝を切る土坑を 2 基検出した。

それぞれの平坦面は同時期に構築されたのではなく、埋土の状態から少なくとも 3 時期の使用が確認できる。上面は標高 229.1 m の高さで S X 01 のほぼ全域から粘土の広がりを確認し、粘土層の下からは、S X 01・D の西壁にあたる位置で直径約 1.0 m の円形をした焼土と、その周囲からは整地に利用されたと考えられる夥しい量の焼台と陶片を検出した。中面は上面の下約 0.2 m で西側を中心とした粘土の広がり焼土を確認した。下面は S X 01・D の岩盤直上から南斜面に続く炭化物の広がり焼土を確認した。

S X 02 は S Y 01 の焼成室から 5 m 程西にあり、標高は 228.8 m を計測する。南側と東側が削平されているため全容を明らかにすることはできないが、岩盤を谷側に高まりを残すように掘削し平坦面を構築している。平坦面は南北約 2.3 m、東西は現存するところで約 1.9 m を計測し、北隅と西隅が丸い形をしている。平坦面の中央で東西約 1.0 m、南北約 0.5 m のほぼ楕円形をした炭化物の広がりを確認した。

S X 03 は S Y 01 の北西の尾根上にあり、標高は 235.3 m を計測する。大きな切り株があり完掘することができなかったが、南北約 1.15 m、東西約 2.2 m の範囲に岩盤に粘土が貼られたかのように広がる平坦面を確認した。

S X 04 は S X 03 の北 2 m 程の尾根上にあり、標高は 235.1 m を計測する。南東部分が自然流失しているものの、岩盤を深いところで 0.4 m 程掘削し東西約 1.65 m、南北約 1.25 m の隅丸方形の平坦面を構築している。北壁沿い中央でピット 1 基を検出した。

S X 05 は S Y 01 の煙道部から 5 m 程北の尾根直下の南向き斜面に構築されている。標高は 234.6 m を計測する。斜面は自然流失をかなり受けているが、東西約 2.2 m、南北は現存するところで約 1.5 m の平坦地を確認した。北壁沿い西側で建物の柱穴と考えられるピット 1 基を検出した。

S X 06 は S Y 01 の煙道部から 5 m 程東にあり、標高は下面で 229.4 m を計測する。南側が調査区外のため全容を明らかにすることはできなかった。調査区をほぼ南北に走る地割れを利用して構築され、埋土の状態から 2 時期の使用が確認できる。上面は現地表から約 1.6 m 下で炭化物の広がりを確認した。この広がりの多くは調査区外に広がると思われる。下面は現地表から約 1.8 m 下で炭化物と焼土の広がりを確認した。炭化物は一部密に分布するものの平坦面のほぼ全域にまばらに広がっている。炭化物層の下から平坦面中央に広がる焼土を確認した。焼土は調査区外に続くが、直径約 1.3 m の円形になると考えられる。他の遺構としては下面の炭化物検出面でピットを 1 基、焼土を取り除いた後ピットを 2 基

検出した。

S X 07 は S Y 01 の燃焼室から 7 m 程東にあり、標高は 226.8 m を計測する。南側が盗掘により削平されているため、全容を明らかにすることはできないが、南向きの急斜面を掘削して平坦面を構築している。平坦面は、東西約 1.9 m、南北は現存するところで約 1.0 m を計測する。平坦面の中央で東西約 1.4 m、南北は現存するところで約 0.9 m のほぼ円形をした焼土面を確認した。

S X 08 は S Y 01 の燃焼室から 5 m 程西にあり、標高は 227.0 m を計測し、S X 02 の一段下の平坦地にあたる。多くは調査区外のため北側一部を確認したに過ぎないが、岩盤を山側で約 0.8 m 掘削した、東西約 2.5 m、南北約 0.44 m の平坦地と、調査区南壁で約 0.7 m を計測する円形か楕円形になると考えられる焼土面を検出した。(宇佐見 守)

ま と め 今年の調査で 2 年度に渡った鶯窯跡の調査 (1,300 m²) が終了し、古瀬戸後期の窯体 1 基と工房跡 8 ケ所を検出した。出土した遺物の大部分は灰原よりの出土で膨大な量となった。

窯体は当初想定していた 3 基ではなく 1 基 S Y 01 で現存長 5 m 60 cm を測り、燃焼室、分焰柱、煙道部の各部位の調査を行ったが焼成室については調査区外のため未調査となった。

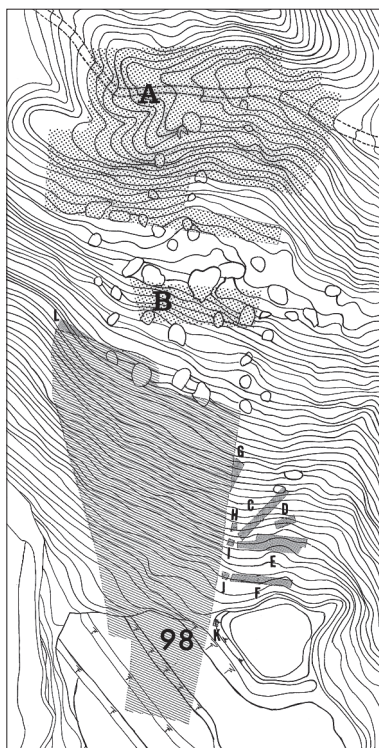
燃焼室では、床面および側壁が赤褐色に被熱硬化し、3 回の改修痕が認められ、側壁間が当初の規模 270 cm から 160 cm にまで縮小されていた。分焰柱は全体を検出することができなかったが、基部は現存部で窯軸方向が長軸で 50 cm、短軸で 48 cm を測る。

窯体に伴う工房跡と考えられる平坦面を 8 ケ所確認した。窯体 S Y 01 の西側南向き斜面 (S X 01・02・08) と東側南向き斜面 (S X 06・07) と北側の尾根または尾根直下 (S X 03・04・05) の 3 群にわけられ、いずれも花崗岩の岩盤を削平し平坦面を構築している。S X 01・02・06・07 の床面からは炭化物や焼土を確認した。

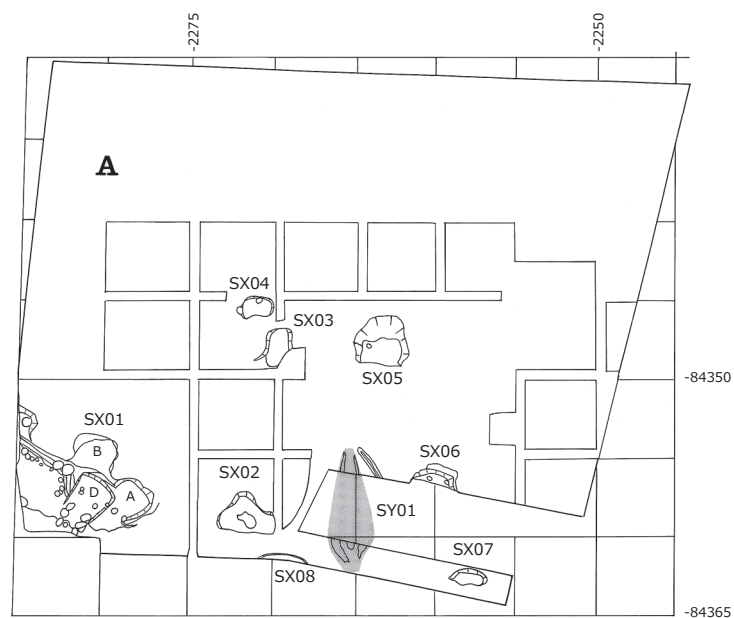
S X 01 は調査区内では一番大きな工房跡で、確認しただけでも 4 ケ所 (A・B・C・D) の平坦面を有す工房があり、それぞれの工房跡は同時に構築されたのではなく、焼土や炭化物や粘土の堆積等から 3 段階確認した。上面は B の南側の平坦面で整地に利用された多数の焼台や陶片がまじり、B の前には粘土層が広がっており、ロクロピットの可能性のあるピット P 03 を検出し、北壁添いからは未焼成の碗とみられる粘土群が出土している。未焼成の重なった天目茶碗はこの下層より出土した。A の南端部分ではピットを検出し、谷に面し開口した覆い屋根が考えられる。D は B の南側で一段低い位置にあり、A の一部を切り構築され、土坑 6 基とピット 4 基を検出し、A と同様に谷に面し開口した覆い屋根が考えられる。推定床面積は A 3.71 m²、B 3.91 m²、D 4.44 m² を測る。

灰原を中心として出土した遺物は、天目茶碗・茶入れ・灰釉平碗・鉢・小皿の喫茶具を中心とした高級日常生活用具類と播鉢・鍋・釜・土瓶の日常雑器類、そして四耳壺・瓶子・水注・花瓶・香炉の祭祀用具類等、2 年度の調査で P 27 コンテナで 3,110 箱出土した。

(小澤一弘)



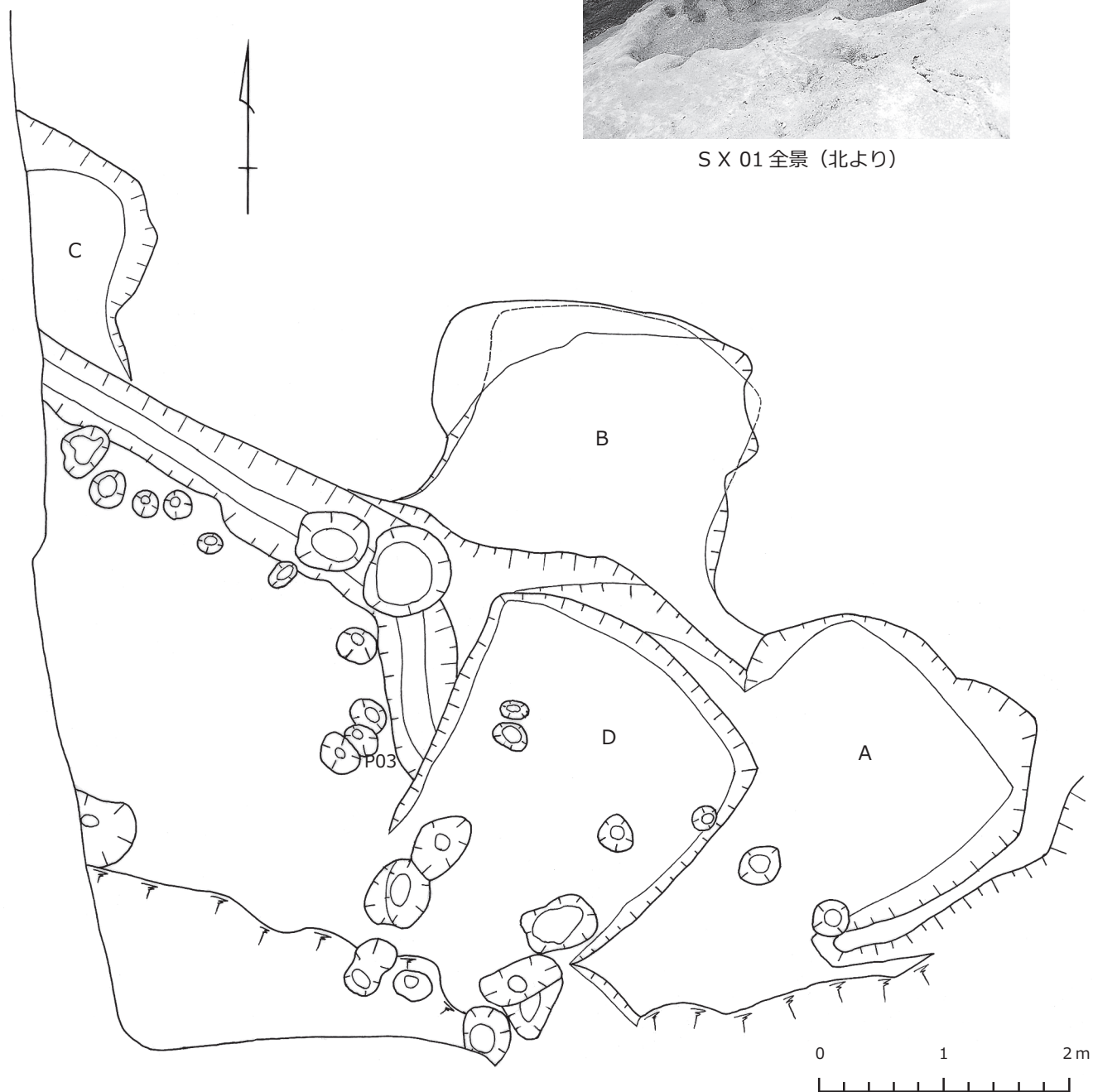
第1図 調査区位置図（1：1,000）



第2図 A区遺構全体図（1：500）



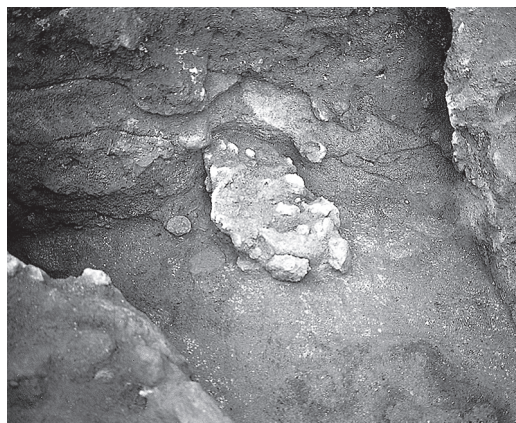
S X 01 全景（北より）



第3図 S X 01 遺構図



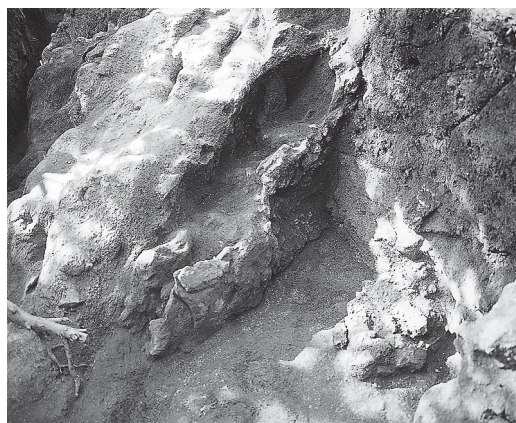
S Y 01 燃烧室



S Y 01 分焰柱



S Y 01 煙道部



S Y 01 窯壁（西側）



S X 04 全景



S X 01・D 全景



S X 01 上面



S X 01 下面



S X 01・B 遺物出土状況（上・下層）



S X 01・B 遺物出土状況（上・下層）



S X 01・B 遺物出土状況（下層）



S X 01・A 遺物出土状況



B区 灰原遺物出土状況



B区 灰原セクション



A区 作業風景



A区 作業風景